

高等学校 国語科 学習指導案

指導者 田村 圭佑

日時 令和6年1月16日(火) 第2限 9:40～10:30

場所 多目的教室

学年・組 高等学校I年2組 38人

単元 「大事を思ひ立たん人は」、「奥山に猫またといふものありて」『徒然草』

(『精選 言語文化』明治書院) 所収

「筑紫に、なにがしの押領使」『徒然草』第六十八段

(新編日本古典文学全集『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄』小学館) 所収

- 目 標
1. 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。([知識及び技能] (3) ウ)
 2. 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えることができる。([思考力、判断力、表現力] B 読むこと ア)
 3. 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図ろうとする。(学びに向かう力、人間性)

指導計画 (全7時間)

第一次 (3時間)

- ・『徒然草』や随筆の文学史について、理解する。
- ・「大事を思ひ立たん人は」を冒頭の主張を中心に構成を意識して読解する。

第二次 (2時間)

- ・「奥山に猫またといふものありて」を最後の一文に注目しながら、構成を意識して読解する。

第三次 (2時間) 【本時 2/2 時間】

- ・第一次、第二次で学習した構成を意識しながら読解し、最後の一文を考える。

授業について

本時で扱う教材は、『徒然草』第六十八段「筑紫に、なにがしの押領使」である。都から遠く離れた九州の地で起きた珍しい話が描かれている。筑紫国の押領使が全てのことに効く薬と信じて毎朝二つずつ大根を食べていた。その押領使は、館の警備が手薄になった際、敵に攻められ絶体絶命の危機に陥るが、館の中から現れた二人の侍に助けをもらう。普段見ない者たちなので誰なのか尋ねると、二人は「長年毎朝、召し上がっている大根です」と答えて去っていくという話である。これに対して兼好は「深く信をいたしぬれば、かかる徳もありにけるこそ」と述べている。

兼好のような迷信に批判的で合理的精神の持ち主がこの話をどのように捉え、このように述べたのか。このあとの第六十九段は、修行の功德を積んだ上人が豆と豆殻の会話を聞くという神秘的な話。第七十三段では、「世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くは皆虚言なり」、「かくはいへど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ信ぜざるべきにもあらず」、「偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず」と述べ、世の中にはデマが横行しているが、仏神の靈驗譚や権者の伝記は一途に信じたり、端から信用せず嘲笑したりすべきではないと述べている。つまり、第六十八段、第六十九段のような仏神の靈驗譚は「偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず」という態度で書かれたものなのだと考えられる。前次に学習した「奥山に猫またといふものありて」では、猫またの噂話を一途に信じた法師は冷ややかに描かれているため、本教材の兼好の態度と比較させたい。

題 目 構成を意識して、『徒然草』を読解する。

本時の目標

- 1.文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えることができる。
- 2.使用されている古語に着目して、効果や意図を理解しようとする。

本時の評価規準（観点／方法）

- 1.文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。
(思考・判断・表現／ワークシート・発表内容)
- 2.使用されている古語に着目して、効果や意図を理解しようとしている。
(主体的に学習に取り組む態度／ワークシート・発表内容)

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
(導入) 1 本時の学習目標を理解する。	・前時に各班で作成した一文をまとめたプリントを配布する。 ・本時は、内容読解をしながら最後の一文をクラス全体でまとめることを伝える。	
(展開) 2 最後の一文とその意図を併せて発表する。 3 話の内容をノートにまとめる。 4 各班で再び最後の一文をワークシートに記入し、発表する。	・クラス全体で各班の意図を共有させる。 ・前時に生徒から出された問いに教師が答える形で話の内容を整理する。 ・キーワードとして、「信」「徳」の二語を意識させる。 ・クラス全体で一つの答えになるようにまとめる。	【思考・判断・表現】 (ワークシート・発表内容) 【主体的に学習に取り組む態度】 (ワークシート・発表内容) 【思考・判断・表現】 (ワークシート・発表内容)
(まとめ) 5 本時のまとめと次時の予告を聞く。	・作者の書いた一文を紹介し、生徒の答えと見比べさせる。 ・随筆としての構成を確認し、本時のまとめとする。	

授業板書計画

「筑紫に、なにがしの押領使」

筑紫

なにがしの押領使

すべてによく効く

・土大根を方にいみじき薬とて
二つづつ焼きて食ひける

〓年久しくなりぬ

・「いかなる人ぞ」

信

頼りにする 召しあがる

・「年ごろ頼みて朝な朝な召しつる
土大根らにさぶらふ」

兵二人

・命を惜しまず戦ひ
皆追ひかへしてげり

徳

危機 → 平和

敵

・襲ひ来り
囲み攻めける

作者（兼好法師）

深く信をいたしぬれば、
かかる徳もありけるにこそ

実践上の留意点

1. 授業説明

本実践は、兼好法師が意見を述べた最後の一文を考えるという活動を行った。古典の授業はともすれば読み偏重の授業展開になりがちであるが、最後の一文を考察するというパフォーマンス課題を設定することによって、思考力・判断力・表現力に働きかけることができ、その成果を評価することができる考えたからである。

第一次の「大事を思ひ立たん人は」では、冒頭で主張、その後に例話や比喻を述べて主張の支えをするという構成になっていることに着目させ、読解を行った。第二次は、「奥山に猫またといふものありて」が最後まで事実を伏せるという巧みな構成であることに気づかせ、効果的な書き方に関心を持たせた。第三次の一時間目は、最後の一文を伏せた「筑紫に、なにがしの押領使」の本文プリントと口語訳プリントを配布し、ヒント等は与えずに一文を考察させた。既習の文法事項を意識させたかったため、古語で書かせた。

本時では、前時に提出させた一文の作成意図をそれぞれのグループに発表させ、クラス全体で共有した。ここでは、すべてのグループで最後の一文は筆者の感想を述べたものであると理解しており、6グループ中、4グループが好意的な感想を述べた一文を考えていた。その後、作者が書いた一文である「深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ」に近づけさせる手立てとして、生徒から出た問いを中心に内容をまとめるという活動を行った。なにがしの押領使が長年すべてのことに効くと毎日二つずつ大根を食べていた点を「信」だと押さえ、誰もいないときに大勢の敵に囲まれて危機的状況に陥り、その状況を土大根が化けた兵二人の助けによって脱することができたという点を「徳」だと押さえた。これらの事項を板書にまとめ、最後にもう一度、グループで一文を考察させると、全グループで「信」、「頼む」、「思ひ続け」、「徳」という言葉を使って一文を書いていた。

2. 研究協議

研究協議では、主に二点の指摘があった。

一点目は、生徒の考えた一文の扱い方についてである。生徒の発表の中に「食ひける土大根の、押領使のわづらひけるを守りたりけるとぞ」というものがあつた。これは、兵と敵の戦いの記述は病気になった押領使が大根の効能で治ったということの比喻だという読解を元にしたものである。作者が書いた一文に近づけるという今回の授業では、この発表は誤りという扱いになるが、本時の目標である文章の種類や構成に気を付けた内容読解ができているという点では誤りではない。このような深い読解ができている発表については、他にも扱い方があつたのではないかという指摘である。

二点目は、授業の中で押領使の危機的状況が解決したことを「徳」という解釈に誘導し、板書したことについてだ。作者が書いた一文に近づけさせるためには必要な板書であつたが、「ご利益＝徳」と解釈したことはやや性急な感があるのではないかという指摘である。

本実践は、「文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること」(〔思考力、判断力、表現力〕B 読むこと ア)を重点的な目標とし、作者の主張や構成が理解しやすい随筆である『徒然草』を用いた。第一次と第二次では論の展開が異なる教材を教科書から、第三次は第二次と論の展開が同じ教材を投げ込み教材として使用した。

今回は、古語で自由に一文を考察する活動は難易度が高いと考え、作者が書いた一文を忠実に再現するという枠組みを設定し授業を実践した。しかし、生徒は文章の種類や構成に着目した深い読解をしており、古語で一文を考察することも難なくしていた。ここまでの授業で古典特有の表現などを理解することができていたためであろう。次回は、研究協議で指摘いただいたような生徒からの発表を積極的に扱った授業展開についても考えていきたい。